現代医療の進むべき道

部長　上　羽　康　夫

人間は約300万年前，４足動物から２足動物となった。そして人間は他の動物とは異なり，文明と文化を作り上げた。人間の発展は手を用いた道具の使用と言語の発達によるが，その原動力となったのは飛躍的な大脳の発達である。大脳の発達は単に動物としての生命維持と種族保存のために用いられるばかりでなく，人間の思想，趣味，科学などの思考を可能にしたのである。そして，個々の人間がそれぞれ違った意志や意見を形成するようになり，他の動物とはその意味においても大いに異なってきた。すなわち，人類全体が発展したばかりでなく，個人の分化をもたらし，個性と個人の価値を作りだしたのである。「人間一人の命は地球より重い」と言われる由縁はそこにある。

さて，医学は人間の歴史を通して徐々に発達してきた。古代においては占術や経験に基づくものであったが約2400年前ヒポクラテスによって現代医学への基盤が作られたのである。中世期には医学も宗教によって大きく支配されたが，ルネッサンスに至って人間の体が科学的に研究され始めた。その後，産業革命に伴う技術革新や顕微鏡の発明などにより医学も大いに転換した。19世紀には病原菌が発見され，消毒薬や化学薬品が開発されて，それまで猛威をふるっていたチフスやコレラ等の伝染病も克服する事が出来るようになった。20世紀に入ると近代科学の進歩に伴って医学も目ざましい進歩を遂げた。化学を用いた血液や尿検査，電気を用いた心電図や筋電図検査，Ｘ線を用いたCTやMRI，アイソトープを用いたシンチグラフィー等診断学は大きく進歩し，ワクチン，抗生物質の発見，手術技術の進歩などにより病気の治療法も大きく前進した。

この急速な現代医学の進歩は研究分野を細分化し，狭い分野を深く研究する事によって遂行し得たのである。すなわち，古代における医師は患者を一人の人間として扱い，身体ばかりでなく精神的な面，経済的な面，或いは社会的な面に至るまで患者を熟知し，その治療にあたったのである。しかし，現代の医療は内科，外科，産婦人科などに分化し，更に内科学が呼吸器系，消化器系，内分泌系など高度に専門化したため，現代医療では人体は便宜上次第に細分化される事になった。そして，人体の形態分析にとどまらず，器官や組織をも分析し，今や染色体，遺伝子のレベルにまで人間を堀り下げ，体を分子のレベルまで分解して見るようになった。この細分化により現代医療は大いに進歩し，平均寿命を延長させたばかりでなく，臓器移殖術の発達により以前は生き長らえる事が許されなかったような重篤な患者が他人の臓器移殖によって救われるようになった。

だが，この現代医学の発展はマウスやラットを用いた動物実験によって得られたデータに基づくものであり，動物としての人間，すなわち肉体に対する治療学の発達であった。人間は，動物としての肉体をもつが，同時に大脳皮質を活発に用いる精神的人格をもつものである。身体と精神とが融合した生物であるがゆえに，身体のみに重点をおいた現代医療では癒しきれない部分があることが明らかになってきた。生命の維持，延長は飛躍的に改善されたが，それに代わってノイローゼや心身症，登校拒否等人間社会のみに見られる病気が増加し，また尊厳死や脳死の問題など現代医療の発達によって生じた新しい問題が提起された。「病は気から」と言われるように，動物としての人間を治療するだけでは人間を治すという医療本来の目的は決して達成されないであろう。身体と精神の両面をもっと幅広くとらえて，完全な一人の人間として患者をとらえる視野が現在の医療に必要なのである。昨年，京都で開催された第23回日本医学会総会のメインテーマは「転換期に立つ医学と医療―創造と調

和と信頼」であったが，今は確かに医療の大きな転換期に来ているように思われる。現代医療は動物としての人間を細かく分解して研究してきたが，21世紀の医療では身体と精神が融合した人間の医療でなければならない。人間は身体と精神との結びつきによって成り立っているからである。脳の働きに関する研究は最近では幅広く行われつつあるが，人間の思考や情緒が身体に及ぼす影響，あるいは身体の活動が精神に与える影響などの問題についてはまだまだ不明な点が多く，今後の研究に待たなければならない。人間研究はされていても，自然科学と人文科学との間にはまだ大きな間隙が存在するように思える。その２つの学域を融合させる分野を新しく開拓する事によって21世紀の新しい医療の展望が開けるのであろう。そのような総合的な研究を発展させる為には自然科学系と人文科学系との緊密な連携を深め，共同研究の体制を確立しなければならないと思う。

京都大学医療技術短期大学部には人間健康科学という共通の研究課題に取り組みながら，全く異なった研究分野に従事している多くの自然科学者と人文科学者がおられる。これらの研究者の力を結集して，新しい医療の道を切り開いてほしいものである。本学部における協力研究体制を一日も早く作り上げ，「京都大学医療技術短期大学部紀要」が新しい医療への道標となることを心より念願する次第である。